

## 慈恵医大のアイデンティティーについて

医学とは医学の歴史であるといわれる。現在の医学のなかにその歴史のすべてが凝縮されているからである。そういった意味では慈恵医大とは慈恵医大の歴史であるといえるであろう。

日本の医学は、明治4年、大学東校（東大医学部の前身）がドイツ人教師を招いて医学教育を始めたことで大きく伸展したが、政府はこの医学校をモデルにして地方にそのコピーをつくっていったため、当時のドイツの研究至上主義的傾向が全国に蔓延することになった。この傾向は今でも続いているらしく、藤井正道氏（元聖マリ医大学長）によると、日本の臨床の教員の頭を支配しているのは現在でも研究8，診療2，教育0.1の割合であるという。その臨床教員を信頼している患者や（とくに）学生にとってはかなり失望する数値ではなかろうか。もっとバランスのとれた数値を期待していただろうからである。

最近、多田富雄氏（免疫学者）は、大学のアイデンティティーを考えると問題になるのは、全国に散らばるミニ東大型の地方大学や私立大学の存在であり、東大を頂点とするこれらコピー大学のピラミッド構造である。これからこれら大学が個性ある大学に発展するためには、この領域だけは何処にも負けないといったものを是非もたねばならないだろう、と論じている。たしかにこのことは医学の研究のみならず、診療、教育についても同様にいえることではないだろうか。

そういった視点で慈恵医大の歴史をながめると、全国のこのような傾向とは違って、きわめてユニークで何処にも負けない診療、研究、教育を行ってきたように思われる。21世紀を直前にひかえた現在、また医療にたいする信



高木兼寛先生



松山棟庵先生

頼が大きく揺らいでいる現在、かつて慈恵が行った諸業績をもう一度振り返ることも決して無駄ではないであろう。

慈恵医大の創立に高木兼寛と松山棟庵が大きく貢献したことはよく知られている。高木は主に設立の精神的支柱をあたえ、松山はその具体的方法を提出したのであった。高木が5年の英国留学を終えて帰国したとき（明治13年暮、海軍医務局に復帰）、是非成し遂げたい仕事有二つあった。一つは病院と医学校をつくることであり、もう一つは留学前から頭を占めていた脚気病の研究であった。病院といっても彼の意図したのは、社会的、経済的に弱い立場の病人のための病院（慈善病院）であり、その経費は英国の例にならって主に皇族の支援を期待していた。また彼の医学校は、医療技術を教えるのみでなく、品性ゆたかな人間味ある医師を養成するものであり、できれば留学先のセント・トーマス病院医学校のように、病院に附属するかたちになりたいと考えていた。

松山棟庵は、それまでに医学校（慶應義塾医学所）を設立していたが、残念ながら高木が帰国した年に廃校にしたばかりであった。その原因は資金不足と人材不足（とくに教員

不足）にあった。この苦い経験を生かして、今度は高木に協力して、もう一度挑戦してみたいと思ったのである。

彼らはまず高木の海軍軍医団と松山を中心とする医師団から英語系の医学研究会（成医会）を結成した。そしてこの成医会を中核にして有志共立的に

医学校（成医会講習所，明治14年5月開校）と病院（有志共立東京病院，同年8月開院）を創っていった。この特筆すべき英語系医学校は，施設は海軍軍医学校を利用し，教師は海軍軍医の無償奉仕によって可能になったのであった。そして10年後には高木が望んだ病院附属のかたちにもできた（東京慈恵医院医学校）。

病院の運営は，これが慈善病院であったため，苦勞の連続であった。これを切り抜けたのはやはり有志共立の方法というか，有志者が資金を出しあい海軍軍医が診療を助けるというやり方であった。有志者の集団としては医師団のほかに婦人慈善会（皇族，華族夫人），東京慈恵会（さらに事業家夫人が加わった）などが有力であった。これら有志者集団の経済的奉仕はきわめて大きく，真の経営者といってよかった。成医会講習所ができたころ50校ほどあった公立私立医学校が，経済破綻その他で明治末年には慈恵医学校を含めてわずか4,5校になってしまったのを見ても，これら有志者集団の奉仕がいかに大きかったかが分かるのである。

この病院では他に見られないユニークな行事がいくつかあった。名僧高德を招いて外来や病棟で講話を聞くというのもそれであった。病人にとっては身体の療養ばかりでなく心のケアもおとらず大切である（身心一如である）ことが力説された。この行事は多くの患者から感謝され，礼状を届ける者も少なくなかった。医学校でも明德会という人間教育講座が設けられ（明治36年），宗教家，文化人から定期的に講話をきいた。医師には，医術のみならず高尚な品性・品格が必要であり，しかもこの品性・品格の根本は慈悲の心，つまり愛にあることが力説された。今日，慈恵で行われている全人的医療（病に苦しみ悩む人を，臓器の集まりとしてではなく，一人の権威ある人格としてみる医療）はこのような努力によって形成されたものである。

高木兼寛の業績のなかで国際的に最も著名なのは何といっても彼の脚気病の研究であろう。これによって彼は脚気病の原因が栄養のアンバランスにあることをはっきり証明したのである（脚気栄養説，明治16年）。そしてその後は食物の改善（麦飯食）によって脚気患者を治療したばかりでなく，一般国民の脚気病予防や健康増進のために努力し続けたのであった。彼の脚気栄

養説はやがてビタミンの発見となり、ビタミン欠乏症の問題に発展するわけであるが、このことは臨床現場からの複雑な問題でも、それを突き詰めていけば、より基本的な問題に到達し、より広い地平に立つことができることを示したのであった。そしてこのような研究の方向は慈恵医大の研究の一つの特徴にもなったのである。